イベント報告

第 21 回インターハイ観戦記

鹿島田浩二

全日本高等学校オリエンテーリング選手権大会 2008 年 3 月 22-23 日 静岡県富士宮市

各世代の総決算が続く 3 月。第 2 週に開催されたインカレに続き、第 4 週は高校生の頂点を競う第 21 回全日本高等学校オリエンテーリング選手権大会が開催された。将来の日本代表を担う原石を求めて 23 日に開催された個人戦を観戦した。

優勝した近藤のルート一部。3→4 レッグを堅実に迂回。ベストラップで勢いをつけた。

原石をもとめて

世界選手権の観戦を面白くする方法の一つは、数年前から JWOC の結果を良く観ておくことだ。シモーネ・ニグリ（スイス）や、アンドレイ・クラモフ（ロシア）が世界に名を知らしめした時も、JWOC での彼らの活躍を知っていた人には予見できたことだろう。日本でも同じことが言える。将来の日本代表を担う宝の原石が、インカレやインターハイに潜んでいるかもしれない。そう思うと見逃せないイベントである。

今回の舞台は富士の裾野、昨年のスプリングカップや、5 月のゴールデン４デイズでも利用された宿泊施設村山ジャンボを競技会場として開催された。初日のリレーは国道 469 よりも南の日沢、2 日目の個人戦は北の村山口登山道が舞台である。

インターハイの最近の動向を整理しておこう。男子は数年前から 4 校を中心に頂点を競っている。

まずは団体戦 2 連覇中で中部地方を代表する東海高校、そして関東では第 1 回から参加する名門麻布高校と桐朋高校に加え、宇野夏樹の活躍で個人 2 連覇中の武相高校である。そして東農大三校、浦和高校などが続く。

個人では、シード選手は先日のジュニアチャンピオン大会で 3 位以内となった山崎・福井（桐朋）・堀田（東海）の 3 名と昨年の大会で 3 位となった伴（東海）の 4 名である。その他 1 年生ながらスピードをもつ野本（麻布）等がどの程度上位に絡めるかが見所となった。

一方女子は昨年まで３連覇した高野（元秋草学園・現十文字学園女子大学）卒業後、個人・団体ともにエントリーがなく、若干淋しい状況となっている。

東海の 3 連覇

団体戦は 22 日の土曜日に開催。一般併設がないため、観戦者は若干少なかったようである。シード選手 2 名づつを擁する東海と桐朋の勝負かと思われたが、東海がシード選手堀田のこの日ベストラップとなる走りで１走から抜け出す。２，３走ではそのまま 2 位以下に差を広げ、結果 2 位桐朋に 26 分の大差をつけ 3 連覇を成し遂げた。個人タイムを見ても 30 分台の 4 選手のうち 3 名が東海で、翌日の個人戦に向けての充実振りがうかがえた。

そしてついに個人戦も

一夜明けて日曜日の個人戦。この日用意されたコースは村山口登山道の北部からスタートするダウンヒル基調のコース。前半にルートの別れるロングレッグがあり、それを軸にミドル～ショートレッグを織り交ぜて緩急をつけたコースとなっている。技術的難易度はそれほど高くないが、気の抜けないレッグが続き、技術力・集中力の差がタイム出るコースといえるだろう。

実際のレースはシード選手のタイムが伸び悩む中、上位は混戦となる。その中で最終的に勝負を制したのは、前日のリレーでアンカーを務めた近藤（東海）である。2 位には麻布の小山、3 位に武相の町井が入った。4 位の堀田までは 2 分以内の差、前日の団体戦とは対照的な接戦だった。優勝者近藤は 1 年生にして初の、団体・個人両タイトルを東海に持ち帰った。

「10 位以内を目標にしていた。優勝は意識していなかった。」とコメントする近藤はオリテンテーリングを始めたのが 2 年の秋。当初は剣道部に所属していたが、同僚が楽しそうに取り組んでいたのを見て入部したという。

「彼は今までにない、根性のあるタイプ」と顧問の大野氏は評する。週 3 回のクラブ活動の日以外にも自主トレもこなし、「他の選手に遅れを取らず走れるようなったと思う。」と控えめに語った。

優勝した近藤選手

彼のルートを見ると、まだブラッシュアップするべきところはある。しかし丁寧に自分のプランを再現しながら地図に描くルートを見ると、地形をきちっと捉え、臨機応変にレースをすす

めていたことが伺える。勝負レッグとなった 3→4 は堅実な迂回ルートでこの日唯一のベストラップをとった（前ページ：近藤のルート）。
「JWOC は？」の質問に、「まだ考えたことはなかった」というが、チャレンジはしたいという。今後の活躍に期待したい。

さて、上位選手のほかに、この日もう 1 人会場を沸かせた 1 年生がいる。麻布の野本がゴールした時、48 分台というタイムに誰もが固唾を呑んだ。直ぐに終盤のコントロール飛ばしが判明するのだが、巡航スピードは 97%台。他の選手より抜き出て速かった。
レース後ショックを隠せない野本だった。2007 年度のインターハイの歴史に彼の名前は記録されないが、会場に居合わせた観客には強い記憶として残った。彼自身にとっても、今後ステップアップしていく上で大きな糧となるだろう。

20 年の時を越えて

さて、筆者は個人戦だけであるが、久しぶりにインターハイをじっくり観戦した。そして高校生の奮闘ぶりが初々しく思えると共に、20 年前、インターハイが誕生した頃を思い出した。

当時、桐朋高校の 2 年であった筆者は、浦和、川和、早大、国分寺など関東で活動していた高校の同期とインターハイを立ち上げた。第 1 回は神奈川県で開催された。競技部分を OB にお願いし、それ以外の運営面を手分けして準備した。「高校生の一番を決めるインカレのようなイベントが欲しい」という純粋な思いが当時の高校生の共通した願いだった。
あれから 20 年、その間には高校オリエンテーリングの危機が叫ばれた時期もあった。しかしこうして再び活気を取り戻し、100 人規模の中高生が集まり、大きな目標となる大会として引き継がれていることを素直に嬉しく思う。
代表レベルでは、昨今世界の舞台での苦戦が叫ばれる。5 年後 10 年後の日本代表を見据えた時、若年層の選手の活性化、競技環境の向上は最重要課題の一つであろう。多くのオリエンティアが彼等の活動、競い合いに目を向けてくれることを期待する。

冒頭にも記したように、この舞台で活躍した選手が 5 年後、10 年後に世界の舞台で活躍し、「JAPAN」の文字をリザルトボード高く掲げてくれる日が来たとしたら、なんとも素晴らしいことではないか。
最後に、自身がインカレという大舞台を終えた直後に、自分達の後輩のためにこれだけの舞台を用意した、現役大学生の運営メンバーの尽力に拍手したい。いつの時代もこうした隠れた熱意がオリエンテーリングを支えてくれていることを忘れてはならない。

（鹿島田浩二）

成績

3 月 22 日(土) 団体戦 「日沢」

ME		
1	東海 EA	1:51:02
	(堀田・山田・近藤)	
2	桐朋 EA	2:17:51
	(福井・細渕・山崎)	
3	麻布 EB	2:20:24
	(小山・尾崎・野本)	

3 月 23 日(日) 個人戦 「村山口登山道」

ME			
1	近藤康満	0:55:10	東海
2	小山達之	0:56:08	麻布
3	町井瑞希	0:56:50	武相
4	堀田 遼	0:56:59	東海
5	岩本拓己	0:58:19	桐朋
6	桜井郁也	0:59:10	東海

インターハイ調査裏話

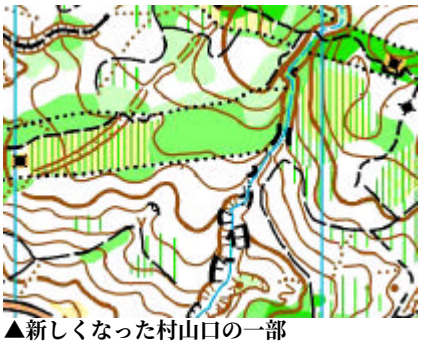
村越 真

昨年の春の時点で、村山口に間伐が入り、植生が随分代わり、トラクター道が多数造られたことは知っていた。応急的にトラクター道の調査を一部のエリアで行なったが、不十分なことは明らかだった。
インターハイ実行委員会から、村山口再調査の依頼があった時、どうせやらなければならないのなら、この機会にやってしまおうと考え、「砂沢」の調査以降、静岡県で数々の地図を仕上げたプロマッパーのロブ・プローライトに打診をした。しかし「興味がわかない」の一言で却下された。そこで、かつての静岡の調査のエース西尾氏と最近は一人で静岡の技術面を支えている田濃に声をかけた。それぞれ２，３日ならできるということだった。分担を決めたが、この時よく見れば僕の受け持ち範囲は莫大だということは自明だったが、いじるのは植生とトラクター道だけだとたかを括ったのが失敗の元だった。

１月に 2 回（実質的には１日半）調査に入った。驚いたことに、以前選考会で使われたエリアでも大量の等高線修正が必要だった。部分的に計曲線間の等高線数が間違っていたりもした。計曲線を正しく引き直すのに、高度計を持ち出す始末。
当初のインターハイ実行委員会から示された締め切りは２月末日であったが、競技責任者には、ぎりぎりの締め切りを問い合わせた。締め切り前最後に動ける週末である３月８・９日に連続で入って、なんとか仕上げた。久しぶりに締め切りのある調査で、心身共に疲れ果てた。
その後、３人の分担範囲をつなげる作業にも時間がかかり、最後は裏技で大学でも作図をした。

これだけのエネルギーをかけたが、いい地図を作ったという満足感は沸かなかった。この地域の間伐作業としては、林業界では有名な先進的なプロジェクトで、最近の林業としては珍しく採算も取れているらしい。それが終わった時こそ、全面的に納得できるレベルで、村山口をお届けしたい。

（村越 真）


▲新しくなった村山口の一部

▲これまでの村山口